

## 地域住民の生物分類技能を活用した「生きもの調査」の視点

A viewpoint of application residents' taxonomic proficiency to survey on lives

守山拓弥\*

MORIYAMA Takumi

1. はじめに 全国的に取り組みが広がっている「田んぼの学校」では、生きものを対象とした自然環境教育を実施している団体が多数ある(宮元ら 2007)。また、農業農村整備分野においても、様々なイベント開催時に「生きもの調査」が実施されている。特に平成19年度より農地・水・環境保全向上対策事業(以下、農地水事業)が実施され、「生きもの調査」を取り入れた活動も多く実施されている(例えば、栃木県農地・水・環境保全向上対策推進協議会 2009)。同事業では生物学の専門家でない農業土木技術者が講師を務めるケースが増えている。そこで本発表では、農業土木技術者の参考とすべく、筆者が実施してきた「田んぼの学校」や農地水事業における「生きもの調査」、特に魚類を対象とした調査の実施方法や実施の際の視点について報告する。

2. 地域住民が先生となる活動 「田んぼの学校」や農地水事業で、魚類を題材とした環境教育を実施する際の重要な視点は、地域の方の経験や知識、文化を尊重し、地域住民に生きもの調査の先生になってもらうことである。人と魚との付き合いは、生態学の専売特許ではなく昔から連綿と続いてきたものである。特に、モンスーン・アジアでは稲作と深い関わりを持った漁撈文化(安室 2005)や魚食文化(石毛ら 1990)が育まれてきた。これらの文化は地域の魚類相に合った技術体系となっているものが多く、例えば筆者の主な活動地域である栃木県西鬼怒川地区では数多くの漁法が年間を通して行われてきた(加藤ら 1999)。また「田んぼの学校」の環境教育的な意義は、「自然体験や生活体験を豊かに提供していると評価することができ、ここに『田んぼ学校』活動の環境教育的意義を認めることができる。」(加納ら 2008)と指摘されている。地域住民に先生になってもらうことは、自然体験から地方名や食文化体験などの生活体験に発展する内容となり、「田んぼの学校」における教育プログラムとしての適正が高い。さらに、農地・水事業での「生きもの調査」においても、全国で18,978(平成20年度現在)もの活動団体を対象に、農業土木技術者が継続的に講師を続けることは困難であり、地域住民主体の調査が確立されることが望まれ、中長期的にみて地域住民に先生として参加してもらうことの意義は大きい。

3. 活動の取り組み方 ここでは、通常の「生きもの調査」の手順(農村環境整備センターHP 参照)を省き、地域住民に調査に参加してもらう方法を中心に議論する。

1) 調査時における地域住民の関わり方 魚捕りを実施するにあたって、地域住民にも協力してもらい、小さな子供には地域住民が付き添って捕り方を教えることが望ましい。これは安全確保のためと、魚捕りの基礎を教えるためである。また、捕れた魚の名前を魚捕りの段階から教えることも重要である。どの種類がどのような場所で捕れるのかも、種による生息環境の違いを示す重要な情報である。なお、魚捕りの段階から種名を教えるには、出来るだけ多くの大人が魚捕りに参加する必要がある。これも地域住民に先生として参加してもらうことの利点である。

---

\* (社)農村環境整備センター

Keywords: 魚類、田んぼの学校、地方名、食文化

2) 地方名を教えてください 地域固有の名前(以下,地方名)を持つ魚がいる場合は,地方名をかならず取り上げるように心がけたい。地方名はその地域で長年受け継がれてきた名前であり,昨今の地方の言語や方言が急速に減少している現状(UNESCO2009)では,「田んぼの学校」等での「生きもの調査」が,地方名を後世に伝える貴重な機会になる。

3) 標準和名を教える 地域住民が先生になる利点の一方で,専門家以外の同定には誤同定も発生する。例えば,コイ科魚類の稚魚を「メダカ」と誤同定することは良くある。そのため,農業土木技術者が,地方名と標準和名との整理をし,両者を併せて学習できるよう努める必要がある。地方名を知っている地域住民は,すでに魚を地域の分類基準にて分類しているため,標準和名との整合をとることは容易である。なお,農業土木技術者が魚類を分類する際には事前に各種図鑑類(例えば,湊2006)で調べることが望まれる。なお,生物は地域ごとに生息種が異なるため,調査対象地域の生息種に絞ることで分類作業の労力の削減と精度向上が期待できる。水田水域における都道府県単位での生息魚類は,「田んぼの生きもの調査」結果(農林水産省2007)を参照されたい。

4) 生態的な特徴を教える 文化面を教えるのと同時に,やはり生物学的には魚の生態などについて正確に教えることも必要である。そこで,採捕された種の生態的特徴や,体の構造的な特徴を教えることも良い。また,大型の魚類が採捕された場合,解剖実習を行うことで魚の構造を知ることができる。

5) 食文化体験により魚を深く知る 魚捕りの文化と同時に食文化体験を取り入れることで,よりいっそう魚のことを理解することができる。それは,地域住民と魚との接点の多くは「食べる」ことである。特に,地方名のついた魚では,個別の調理法を持つことが多い。地域で育まれてきた人と魚の関係を学ぶには,捕り方,地方名,食文化を一連で体験することが,より深い理解へとつながると考えられる。

4. 農業土木技術者と地域住民との共同 農業土木技術者は,通常の業務において地域住民,特に農業者との交流を持つ機会が多くある。常時からの地域住民との交流による信頼構築は,「田んぼの学校」等での「生きもの調査」の際に,地域住民の協力を得る重要な要素となり得る。また,「生きもの調査」に先立った地域住民と交流から,地域住民の魚捕りの文化を聞き込むことがよりよいプログラム作成にもつながる。以上のように,農業土木技術者と地域住民が協力することで,生物の専門家だけでは達成困難な地域の生活体験を含めた重層的な活動を行うことができる。地域住民との交流を持つ農業土木技術者は,その点を大いに活かすことができ,また地域住民の持つ潜在的な生物分類技能を活用することが農業土木技術者の専門でない生物分類の視点を補うことができると考えられる。

【引用文献】 宮元均・加納麻紀子・水谷正一(2007)田んぼや水路を活用した「田んぼの学校」が参加者に及ぼす教育効果-代表的な3つのグループにおける参加者調査から-。26pp,395-400。

栃木県農地・水・環境保全向上対策推進協議会ホームページ。http://www.tcgnoachimizu.net/index.htm

安室知(2005)。水田漁撈の研究—稲作と漁撈の複合生業論。慶友社

石毛直道・ケネスラドル(1990)。魚醬とナレズシの研究—モンスーン・アジアの食事文化。岩波書店

加藤潤・中島香子・水谷正一(1999)。場と主体から見た農村部における魚とりの変遷過程 - 栃木県西鬼怒川地区を事例として - ,農村計画学会誌,18(1),43-54。

加納麻紀子・宮元均・水谷正一(2008)。「田んぼの学校」活動の環境教育的意義(特集 学びの場,育ちの場としての農村)農村計画学会誌 27(3),119~124

社団法人農村環境整備センターホームページ。http://www.acres.or.jp/Acres/Index.html

UNESCO(2009)。http://portal.unesco.org/

湊秋作(2006)。田んぼの生きもののおもしろ図鑑。企画(社)農村環境整備センター

農林水産省(2007)。田んぼの生きもの調査調査結果-平成13~18年度-企画 農林水産省・製作(社)農村環境整備センター・協力(財)自然環境研究センター